

専門家は変わるか？ 市民は変わるか？

RISTEX研究開発プログラム「21世紀の科学技術リテラシー」
平成17年度採択研究

「研究者の社会リテラシーと非専門家の科学リテラシーの向上」
の事例から見えること

話題提供 吉田 省子
北海道大学大学院農学研究院学術研究員

1: GMOを題材に、多様な対話を重層的に組合わせる試み

1: 意図:

専門家と市民との相互理解の深化を図り、科学リテラシーと社会リテラシーが共に向上する可能性を探る。

2: これまでの現場:

① 小規模対話フォーラム

2006年5月
～2007年8月

② 円卓会議準備会

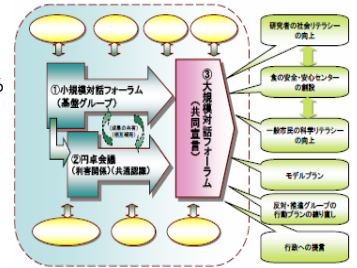
2007年3月17日 札幌

③ 北海道GMコンセンサス会議意見交換

2006年11月25日 と 2007年2月3日
主催は北海道庁

(参考) 専門家による意見交換会

2006年11月25日(座談会)
2007年2月4日(専門家会議1)
2007年9月30日(専門家会議2)



2: 市民の変化？ 現場から(1)

1: 個人の変化(1年間):

●A(千歳)

入居業者
銀行農業・グリーン農業
GMOを作付けしたい
小規模対話フォーラム
円卓会議準備会
途中でコンセンサス会議
GMO推進者の学習会参加

GMO反対派に対する

敵対意識

やはり問題はかなりある。
それを無視しては絶対に
いけないという気持ち

●B(千歳)

B:消費者
市民生活・消費者協会参加
野田直樹所支援活動
小規模対話フォーラム
円卓会議準備会

頭からGM-NO!

知らないでただ怖
がっているのはい
やだと思う(知っ
た上で怖がりた)

2: 専門家(科学者)に対する態度変化: (札幌 2007年3月16日の意見交換)

- 不信と非難 ← 背景: GM大豆を食べたラットの仔に影響が出たとした実験
- 信頼の兆し ← 本音で「やりとり」動物実験とは何か、科学的実験が備えている条件や検証実験等
- 信頼感 ← ゲスト「再現」…反GMOの側の人の実験であってもその結果を信じる
⇒ 無知な者にリスクを丁寧に伝えてもらえる場が欲しい
- 市民の変化 ← ゲスト「追試は無理だが、ある程度疑問に答える試験をしてくれる機関の紹介、専門家として実験企画書を書く手伝いはできる」
⇒ 科学者と消費者の結びつきを願う

3: 専門家の変化？ 現場から(2)・・・市民の変化が随伴

●C(実験動物学):

市民は繰返し問う

⇒ある実験のせいで不安に思っている市民のために、大学は何故追試をしてくれないの？

⇒今の大学組織と評価制度では対応できない(最初の反応)

市民に対し狭義の専門性を超えて、専門家としていいたい何が助言でき、協力できるのかを考え始めた。

⇒参加者も変化

●D(育種学) (2000年農水省コンセンサス会議でも情報提供):

- ・03～4年 GM作物／食品に反対する市民の愚かさを強調
- ・07年1月の事前打合せ: 基本的には2000年と同じ考え。
- ・1月17日小規模対話フォーラム当日

オールドバイテク受け入れているならGMも受け入れて

VS

研究自体に反対しているわけではない。素人を馬鹿にする態度が問題

傲慢だったかもしれない。相互理解が必要で、「科学者が社会を理解すること」が必要だった。

⇒市民の態度も変化:「素人の私たちももっと知りたい」

4: 変わる？ 変わらない？

1: 変わるか？・・・現場から見たこと:

- 専門家はコンセンサス会議で変わるものではない(自明か)
- 「対話」による変化の可能性はある(専門家も市民も)
⇒専門家が歩み寄ると、市民も歩み寄るといふ我々の経験則(逆はない)

2: 変化を阻むもの:

- 変えられない、という大きなプレッシャー(主に研究者)
⇒評価システムの変化なくしては若い研究者を誘いにくい
- 研究コミュニティが寛容しても困難さがつきまとうだろう
 - ▲変えられることへの恐れ(主に反対派)
 - ▲変化が一方向のかもしれないという不安
 - ▲時間の無駄という意識—議論が意思決定に反映されない
 - ▲変わることを受け入れる覚悟ができていない

3: 現場からの発信:

- GMO問題では、科学リテラシーと社会リテラシーの向上はペアで
- 専門家と市民のつながりを点から線や面にするための方策は？
⇒知識が求められる場合は常に生起していることとあわせてプログラムを考える必要
- 継続的対話の場が必要(場所・人) ●対話以外で協働できるプログラムの開発